

# 大学生のインターネット利用と精神的健康に関する研究

A study of Internet Use and Mental Health in University Students.

田中道弘

TANAKA, Michihiro

本研究では、大学生のインターネット利用と精神的健康との関連について検討した。従来の研究では、インターネットの利用時間による問題が重要視されてきたが、本研究では、インターネット上でのモラル（インターネット・モラル尺度）という新たな基準とを合わせて検討を行った。精神的健康の基準としては、病理的傾向に基づく自己愛（病理的自己愛）、時間的展望、自己肯定感の3つの尺度を用いた。

対象は、茨城県内の大学3校（国立大学2校、私立大学1校）と埼玉県内の大学1校（私立大学）の合計4校の学生、405名に調査協力を依頼し、有効回答397票を得た（男性240名、女性157名）。年齢範囲は18歳から28歳までであり、平均年齢は、20.1歳（男性20.3歳、女性19.9歳）であった。

本研究の結果、インターネットの利用時間が121分を超える大学生群では、他群と比べ“時間的展望”と“自己肯定感”の得点が概ね低いという結果が得られたものの、病理的自己愛について有意差は確認されなかった。一方、インターネット・モラルの低い大学生群は、高群よりも時間的展望、及び自己肯定感の各平均得点が低く、病理的自己愛の平均得点が高いことが示された。

これらのことから、大学生のインターネット利用と精神的健康との関連を検討する際に、インターネット・モラルは精神的健康と深く関わりがあるとともに、インターネット利用者の精神的健康に関する一つの基準となりうることが示唆された。

## 問 題

1998年、Krautら（Kraut et al., 1998）は、インターネットをより多く使うことは、孤独感の増加や、抑うつ増加とも関連していたという衝撃的な研究結果を発表した。青年心理学の分野でも、インターネットの利用時間の長い高校生は、社会的な孤立を経験し、友人関係や親子関係の悪化が指摘されている（Sanders et al., 2000）<sup>1</sup>。このように、現代社

会を取り巻く環境において、インターネットの利用時間に関する問題は、たびたびクローズアップされている。しかし、単純にインターネットの利用時間の長さによって、社会的孤立感を経験したり、抑うつを経験したりするなどの精神的健康感が低減するとは考えにくい<sup>2</sup>。

インターネット上で社会的な孤立感を高める要因や、精神的健康感を低減させる要因を検討する場合には、利用者側の自己の内面性

---

キーワード：インターネット・モラル、精神的健康、病理的自己愛、時間的展望、自己肯定感  
Key words : Internet moral, mental health, pathological narcissism, time perspective, self-positivity

による問題についても考慮する必要がある。

そこで、本研究では、研究において、病理的基準に基づく自己愛や、利用者側のモラルという視点から、大学生のインターネット利用に関する研究の検討を試みたい。

そもそも自己愛には、精神的に好ましい面と<sup>注3</sup>、病理的な側面があることが知られている。自己愛の肯定的な側面には、創造性や自尊心などの源泉があり、病理的な自己愛には、両親が子どもの自己愛を満たすことができなかつたり、反対に甘やかさしや過度な賞賛などによって非現実的な誇大自己を固着させてしまうことがあり、傷つきやすく、嫉妬深く、他者からの賞賛や注目を渴望する傾向にある（岡田、1999）。研究者によっては、自己愛の肯定的側面と、病理的な側面とは、連続的なものとする立場や（Kohut, 1971）、この両者を質的に異なったものとする立場（Kernberg, 1984）とがあるが、本研究では特に病理的な側面に焦点をあてる。つまり、この病理的な自己愛の高い者は、インターネット上でも好ましい対人関係を築くことができず、社会的孤立感を経験したり、精神的健康感を低減している可能性があるからである。

他方、利用者側の“インターネット上のモラル(倫理)”について考えることも重要であろう。インターネット上でのモラルには、インターネット利用者がネット上でのエチケットである“ネチケット”の理解や、インターネット上で巻き起こる様々な犯罪やトラブルに関する知識があるだけでなく、自分がネット上での問題に巻き込まれないための知識などが求められる。インターネット上では、仮に匿名性の関係であっても、ネットの向こう側には生身の人間がいるということを意識することは重要であり、相手が見えないからこ

そ現実の社会以上に相手を気遣い、敬うことなどが求められる。しかし、インターネット上では、匿名性の問題を逆手にとって、インターネット上において様々な問題を起こしたり、犯罪を行う者がいる。インターネット上だからといって、何をやっても許されるわけではない。そのようなわけで、インターネット研究の中には、倫理的な側面を考慮することも重要であると思われる。特に、モラルの高い大学生群と、低い大学生群とでは、精神的な健康感にも大きく影響していることが予測される。

そこで、本研究では、分析を大きく二つに分けて検討を行うことにする。まず、第1研究においては、インターネットの利用時間を独立変数とし、従属変数に“病理的自己愛”の変数を配置し、両者にどのような関連があるかを検討していく。インターネットの長時間利用者の中には、抑うつ感を経験したり、社会的孤立を経験するという報告があるが、そこには“病理的自己愛”の影響はないのかどうか検討を試みる。

第2研究では“インターネット上でのモラル”を独立変数とし、従属変数に「病理的な自己愛」を配置し、両者にどのような関連があるかを検討する。そして、研究1の結果を踏まえながら、“インターネット利用時間”と“インターネット上のモラル”とでは、どちらが大きく、“病理的な自己愛”に影響しているかどうか検討を行う。

なお、本研究では、他の精神的健康感の基準として、時間的展望と、自己肯定感に関する基準を合わせて検討する。

時間的展望については、Lewin（1942）が、生活空間の理論の中で、個人の生活空間には、その人が現在の状況だけではなく、過去や未

来までもが含まれていることを指摘している。彼は、時間的展望を「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1951) と定義している。Allport (1955) は、「人間の人格的実存にとって中心的だと考えられる長期的な目標を持っていることが、人間と動物、大人と子ども、それに多くの場合、健康な人格と悩める人格との違いとなる」と述べている。つまり、精神的に健康で、自己を好ましく思っている調査協力者である大学生は、長期的な目標や当面の見通しをもっており、このことが自己評価をする際にも反映されるものと思われる。

自己肯定感は、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」と定義されるが、Rosenberg (1965) の自尊心尺度に含まれるような、respect (自己に対する尊敬) の概念を含まない。これは、自分を尊敬する (respect) こと自体が、日本人には異和感を感じやすいためである (田中, 2005b)<sup>3</sup>。この概念に基づいて作成された、自己肯定感尺度は、ベック抑うつ性尺度との関連においても中程度の負の相関 ( $r = -.573$ ) が確認されている (田中, 2005b)。自己に対する肯定的な感情は、最も精神的な健康と結びつく概念の一つであると思われるため、本研究でもこの基準を採用し、検討を行うことにする。

## 研究 1

第 1 研究においては、従来からよく利用されているインターネットの利用時間を独立変数とし、インターネットの利用時間が、従属変数の“病理的自己愛”“時間的展望”“自己肯定感”にどのような影響を及ぼしているかを検討する。

## 研究 1 の方法

**対象**：2003年11月から2004年3月にかけて、茨城県内の大学3校 (国立大学2校、私立大学1校) と埼玉県内の大学1校 (私立大学) の合計4校の学生、405名に調査協力を依頼し、有効回答397票を得た (男性240名、女性157名)。年齢範囲は18歳から28歳までであり、平均年齢は、20.1歳 (男性20.3歳、女性19.9歳) であった。

**調査内容**：(1) 自己肯定感尺度 ver.2 (田中, 2005b) の8項目 (4段階評定)<sup>5</sup>、(2) 時間的展望体験尺度 (白井, 1994) の18項目 (5段階評定) であり、目標指向、希望、現在の充実感、過去受容の4つの下位尺度から構成されている、(3) 病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度 (岡田, 1998) の18項目 (6段階評定、以下“病理的自己愛”)(4) インターネット利用時間に関する質問、であった。

なお、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階評定が採用されている。

## 研究 1 の結果

本研究では、まず自己肯定感尺度 ver.2 (以下、自己肯定感) の検討を行った。因子分析の結果、すべての項目が因子負荷量 .41以上で第1因子にまとまり単因子構造が確認された。自己肯定感の信頼性は、 $\alpha = .814$ であり、高い信頼性が確認されたため本研究に採用した。なお、各尺度の平均得点と標準偏差は、以下の通りであった。

自己肯定感の平均得点と標準偏差は、23.32点 (SD = 4.40) であった。時間的展望体験尺度では、「目標指向」下位尺度の平均得点と標準偏差は、16.0点 (SD = 5.24) であり、「希

望」下位尺度の場合では12.88点（SD = 3.33）、「現在の充実感」下位尺度では16.0点（SD = 4.71）、「過去受容」下位尺度では11.13点（SD = 2.99）という結果であった。

病理的自己愛尺度の平均得点と標準偏差は60点（SD = 9.59）であった。

インターネット1日平均の利用時間の分類は、使用しない：0分、30分以内、31 - 60分以内、61 - 120分以内、121分以上の5群とした。なお、特に利用時間の長かったの内訳は、121 - 180分以内（18人）、181 - 300分以内（12人）、301分以上（9人）であり、このうち1日平均900分利用すると回答した学生が1名いた。

次に上記で示された通り、インターネット利用時間を基準に5群に分け、これら5群の各群の自己肯定感得点、時間的展望体験得点、及び病理的自己愛得点の平均得点の間に有意な差があるかどうかについて一元配置の分散分析により確認した（表1）。

その結果、インターネット利用時間 ~ の各群と、自己肯定感尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された（ $F(4,392) = 4.18, p < .01$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、群と群（ $>$ ）の自己肯定感の平均得点の間に有意な

差が示された（ $MSe = 18.8, p < .05$ ）。

次にインターネット利用時間 ~ の各群と、時間的展望体験尺度の4つの下位尺度について、一元配置の分散分析を行った。

インターネット利用時間 ~ の各群間での、「目標指向」下位尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された（ $F(4,392) = 2.46, p < .05$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、群と群（ $>$ ）の平均得点の間に有意な差が示された（ $MSe = 27.0, p < .05$ ）。インターネット利用時間 ~ の各群間での、「希望」下位尺度の平均得点の間に有意な差があることが示された（ $F(4,392) = 2.84, p < .05$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、群と群（ $>$ ）の平均得点の間に有意な差が示された（ $MSe = 10.9, p < .05$ ）。インターネット利用時間 ~

の各群間での、「現在の充実感」下位尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された（ $F(4,392) = 2.75, p < .05$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、群と群（ $>$ ）の平均得点の間に有意な差が示された（ $MSe = 21.8, p < .05$ ）。インターネット利用時間 ~ の各群間での、「過去受容」下位尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された（ $F(4,392) = 4.58, p < .01$ ）。そこで

表1 インターネット利用時間の各群の5群別各得点、標準偏差

内 容	0分	30分以内	31 - 60分	61 - 120分	121分以上	F	Tukey
	n=66	n=145	n=87	n=60	n=78		
自己肯定感	23.5 (3.60)	23.4 (4.31)	23.6 (4.12)	24.2 (4.50)	20.8 (5.61)	4.18 **	>
目標指向	15.7 (5.31)	16.3 (4.92)	16.7 (4.89)	16.4 (5.72)	13.7 (5.83)	2.46 *	>
希望	12.7 (3.23)	12.9 (3.22)	13.2 (3.06)	13.6 (2.98)	11.4 (4.51)	2.84 *	>
現在の充実感	15.9 (4.48)	15.4 (4.76)	16.4 (4.31)	17.4 (4.87)	14.7 (5.07)	2.75 *	>
過去受容	11.7 (2.74)	10.9 (3.08)	11.6 (2.62)	11.4 (3.03)	9.5 (3.15)	4.58 **	>
病理的自己愛	60.2 (9.36)	60.3 (9.26)	59.9 (9.11)	58.8 (8.42)	60.5 (13.05)	n.s.	

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

多重比較 (tukey) を試みたところ、群と群 ( ) の平均得点の間に有意な差が示された (MSe = 8.58,  $p < .05$ )。

インターネット利用時間 ~ の各群間での、病的自己愛尺度 (病的特徴に基づく自己愛に関する尺度) の各平均得点の間には有意な差はなかった。

### 研究1の考察

全体的に見ると、121分を超える長時間のインターネット利用者は、自己肯定感が低く、目標指向、希望、現在の充実感、過去受容の得点もそれぞれ低い傾向にあった。自己肯定感に関して言えば、この傾向が顕著に示されているように思われる。この結果は、Krautら (Kraut et al., 1998) が主張する結果と同じような結果が示されたと言える。

ところが、今回有意差は確認できなかったものの1日120分程度までの利用であれば、逆に全体的には利用時間が延びるにつれて、自己に対して好ましく思っている者の数が増加しているように思われる。つまり、インターネットを全く利用しない者よりも、ある程度利用している者の方が、精神的健康感が高い可能性がある。この結果は、インターネット環境の整備による問題も大きいだろう。近年、インターネットの利用形態は、家庭では以前のような利用時間に依りて使用料が変動する従量制による料金システムではなく、安価な価格 (1ヶ月2000円~3000円前後) で常時接続可能な定額制の環境にあり、街中でもインターネットカフェが次々とオープンしており、現代では気軽に利用できる情報ツールとなっている。また調査協力者は、大学生であるために、大学でも個人IDを利用し、インターネット利用が可能である。このよう

な環境下では、全くインターネットを利用しない学生の方が特殊であり、適度に利用している学生の方が、好ましい人間関係を形成したり、精神的に健康な状態を保つことが可能であるのかも知れない。

一方、インターネット利用時間の長さによる基準では、病的自己愛の各平均得点の間には有意な差はなかった。つまり、インターネット利用時間が長いからと言って、そこに病的自己愛という変数が影響を及ぼしているとは言えないことが推測できる。しかし、病的自己愛は、別の形で大学生の精神的健康に影響を及ぼしている可能性がある。

そこで、研究2では、“インターネット上のモラル”を基準として、“病的自己愛”、“時間的展望”、“自己肯定感”との関連について検討をおこなうことにした。

### 研究2

研究2では、研究1の結果を踏まえ、“インターネット上のモラル”を独立変数とし、この変数が、大学生の自己肯定感、時間的展望、病的自己愛とどのように関連しているのかを検討することにした。

#### 研究2の方法

対象：研究1と同じ。

調査内容：(1) 自己肯定感尺度 ver2 (田中, 2005) の8項目 (4段階評定)、(2) 時間的展望体験尺度 (白井, 1994) の18項目 (5段階評定)。この尺度は、「目標指向」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の4つの下位尺度から構成されている。(3) 病的特徴に基づく自己愛に関する尺度 (岡田, 1998) の18項目 (6段階評定、以下“病的自己愛”)(4) イ

インターネット・モラル尺度Ver.1（田中, 2005）の10項目（5段階評定）<sup>6</sup>。

## 研究2の結果

本研究では、まず新たに作成したインターネット・モラル尺度について検討を行った。主成分分析の結果、すべての項目が第1主成分の中に.496以上の因子負荷量でまとまり、単因子構造が確認された。インターネット・モラル尺度の信頼性は、 $\alpha = .825$ であり、高い信頼性が確認されたため本研究に採用した。そこでインターネット・モラル尺度得点の上位下位それぞれ25%の数値を求め、その基準をもとに低群（10 - 39点）中群（40 - 47点）高群（48点 - 50点）に分類した。この分類によって、インターネット・モラル得点の各群と、自己肯定感、時間的展望、病的自己愛の各平均得点との間に有意な差があるかどうかについて一元配置の分散分析を行った（表2）。

その結果、インターネット・モラル得点の各群間での、自己肯定感尺度の各平均得点の間には有意差があることが示された（ $F(2,394)=3.44, p<.05$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、モラル低群と高群の平均得点の間に有意な差が示された（MSe

$= 19.1, p<.05$ ）。

次に、インターネット・モラル得点の各群間での、時間的展望体験尺度の4つの下位尺度について一元配置の分散分析を行った。以下は、その結果である。

インターネット・モラル得点の各群間での、「目標指向」下位尺度の各平均得点の間には、有意差があることが示された（ $F(2,394)=3.73, p<.05$ ）。そこで多重比較（tukey）を試みたところ、モラル低群と高群との平均得点の間に有意な差が示された（MSe = 26.9,  $p<.05$ ）。インターネット・モラル得点の各群間と、「希望」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり（ $F(2,394)=6.45, p<.01$ ）、多重比較（tukey）を試みたところ、モラル低群と中群・高群の平均得点の間に有意な差が示された（MSe = 10.8,  $p<.05$ ）。インターネット・モラル得点の各群間での、「現在の充実感」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり（ $F(2,394)=7.73, p<.001$ ）、そこで多重比較（tukey）を試みたところ、モラル低群と中群・高群の平均得点の間に有意な差が示された（MSe = 21.4,  $p<.05$ ）。インターネット・モラル得点の各群間での、「過去受容」下位尺度の各平均得点の間には有意差があり（ $F(2,394)=6.92, p<.001$ ）、多重比較（tukey）を試みた

表2 インターネット・モラルの3群別の各平均得点、標準偏差

内 容	モラル低群	モラル中群	モラル高群	F	Tukey
	n=78 平均 (SD)	n=197 平均 (SD)	n=122 平均 (SD)		
自己肯定感	22.3 (4.92)	23.3 (4.17)	24.0 (4.33)	3.44 *	低群<高群
目標指向	15.0 (5.17)	15.9 (5.14)	17.0 (5.28)	3.73 *	低群<高群
希望	11.8 (3.64)	13.0 (2.98)	13.5 (3.52)	6.45 **	低群<中群・高群
現在の充実感	14.1 (4.70)	16.3 (4.46)	16.5 (4.85)	7.73 ***	低群<中群・高群
過去受容	10.1 (3.03)	11.2 (2.89)	11.7 (2.96)	6.92 ***	低群<中群・高群
病的自己愛	64.4 (8.53)	60.8 (8.51)	55.7 (10.32)	23.25 ***	低群>中群>高群

\*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

ところ、モラル低群と中群・高群に、平均得点の間に有意な差が示された ( $MSe = 8.65$ ,  $p < .05$ )。

最後に、インターネット・モラル得点の各群間と、病的自己愛尺度について一元配置の分散分析を行った結果、インターネット・モラル得点の各群間での、病的自己愛尺度の各平均得点の間には有意差が示された ( $F(2,394) = 23.3$ ,  $p < .001$ )。多重比較 (tukey) を試みたところ、モラル高群 < 中群 < 低群の順に、平均得点の間に有意な差が示された ( $MSe = 83.0$ ,  $p < .05$ )。

## 研究2の考察

インターネット・モラル得点の高群と低群との群間での自己肯定感尺度の平均得点は、モラル高群が低群よりも自己肯定感得点が高かった。その結果、自己に対して好ましく思うことと、モラル的な側面は無関係ではない可能性が示されたことは興味深い。また、インターネット・モラル得点の各群と、時間的展望体験尺度の各下位尺度との平均得点との間には、概ねモラル得点の高群ほど、「目標指向」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の各得点が高い傾向が示された。これは、Lewin (1942, 1951) や Allport (1955) が指摘した、時間的展望の定義に基づく精神的な健康さと概ね合致するものと思われる。

病的自己愛については、研究1とは異なり、インターネット・モラル得点の高群 < 中群 < 低群の順に得点が高くなる傾向が示された。

以上の結果から、インターネット・モラルの低い学生は、自己に対して好ましく思えず、将来の目標や希望などが持たず、病的自己愛が高い傾向にあることが示された。

## 総合考察

研究1では、インターネット利用時間が120分までの群と、121分を超える群では、後者の自己肯定感の平均得点が有意に低い結果となった。また、時間的展望に関する各下位尺度にも概ね、121分を超えるインターネット利用者の得点が有意に低い結果となっていた。この結果は、Krautら (Kraut et al., 1998) の主張と一致するようにも思える。一方、インターネットの利用時間の違いによって、病的自己愛の平均得点の違いは確認されなかった。

研究2では、インターネット上のモラルを独立変数として、自己肯定感、時間的展望、病的自己愛との関わりを検討したが、全体的には、研究1の結果よりも有意差が強く現れていた。特に、インターネット上のモラル得点の高群 < 中群 < 低群の順に、病的自己愛の平均得点が有意に高いことが確認されており、この点はインターネット利用時間を独立変数とした研究1の場合と大きく異なる。また、インターネット・モラルの高群は低群よりも、自己肯定感が高く、時間的展望の各得点も高く、精神的に好ましい傾向にあることが確認できた。これらの結果は、インターネット上のモラルという基準が、インターネット利用と精神的健康感との関係性を研究する際の新たな基準になりうることを示している。また、同時に、本研究の結果から、大学生のインターネットのモラルを、情報教育の中に取り込み、高める教育をしていくことで、インターネットを長時間利用する大学生の精神的健康感を好ましい方向に導くという可能性も示されたと言える。もちろん、これだけでインターネットの長時間利用者に関す

る問題など解決されたわけではないが、一つの斬新な結果を示すことができたと思われる。

しかし、研究1で示されたインターネットの利用時間と抑うつに関する問題などのように、インターネットの長時間利用者が、どのようなサイトを、どのような目的で利用しているかなども合わせて詳細に検討をしていく必要も残されており、さらなるデータを蓄積しながら大学生のインターネット利用と精神的健康との関連を明らかにしていくことが求められる。

## 脚注

(注1) ただし、Sandersら(2000)の研究では、Krautら(1998)の研究のように、抑うつ感には有意差が確認されていない。

(注2) 大学生のインターネット利用状況を考えた場合、例えば、“レポートの作成や卒業論文作成、あるいは就職活動の情報収集のためによる長時間の利用”と、“とりとめもなく、自分で利用時間をコントロールすることができずに利用してしまう、アディクシオンのような利用”とでは、その意味が大きく異なってくる。

(注3) 近年の自己愛に関する研究では、特に、精神的に好ましい面(健康な自己愛)の重要性が注目されている。特に青年期の領域においては、日本では小塩(2004)が中心に、研究活動を行っている。自己愛に関する研究においては、健康な自己愛との関係性を考慮することも重要であるが、本研究では、特に対人関係などで問題を起こしやすいと思われる病的側面に焦点を当てることにする。

(注4) 自尊心を測定する場合に、Rosenberg(1965)の邦訳版が用いられるが、この尺度の第8項目(I wish I could have more respect for myself.)がしばしば問題となっている。Rosenbergの自尊心尺度には、多くの翻訳版があるにも関わらず、1因子構造から外れる場合が多いことが指摘されている

(田中・上地・市村, 2003)。この問題について田中(1999, 2002)は、Respectは日本語では「尊敬」と訳されているが、日本人にとっては、自分を尊敬することが、日本文化にはそぐわないのではないかと指摘している。

(注5) 自己肯定感尺度 ver.2は、これまでの自尊心研究の中で批判が絶えなかったRosenbergの自尊心尺度を改良したもので、田中(2000)より検討が進められ、その改良版が作成されている(田中, 2005a, 2005b)。項目は、“私は、自分のことを大切だと感じる”“私は、時々、死んでしまった方がましだと感じる。”“私は、いくつかの長所を持っている。”などの8項目で構成され、一因子構造が確認されている。また、田中(2005b)によると、自己肯定感尺度 Ver.2の項目数は、Rosenberg(1965)の自尊心尺度よりも2項目少ないが、信頼係数はRosenbergのものと同等か高い数値が報告されている。

(注6) インターネット・モラル尺度の項目の選定については、筆者の2003年度の講義に参加した学生から、事前に“インターネットを利用する際に、倫理的な問題から注意すべきことには、どのようなことがありますか”という質問をし、自由記述で回答させた内容を参考にしながら項目を作成したものである。

## 文献

- Allport, G.W. 1955 *Becoming*. New Haven: Yale university Press. (富沢登(訳)1959 人間の形成理想社).
- 林潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討カウンセリング研究, 20, 162-169.
- Kernberg, O.F. 1984 *Severe personality disorders: Psychotherapeutic Strategies*. Yale University Press. (西園昌久(監訳)1996 重症パーソナリティ障害 岩崎学術出版社).
- Kohut, H 1971 *The analysis of the self*. International universities Press. (水野信義・笠原薫(監訳)1994 自己の分析 みすず書房).
- Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Tri-

- das, M. and Scherlis, W. 1998 Internet Paradox: a social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and moral*. New York: Houghton Mifflin. (末永俊郎(訳) 1954 時間的展望とモラル 創元社 pp.134-164).
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. In D. Cartwright (Ed) : New York. (猪股佐登留(訳) 1979 社会科学における場の理論(増補版) 誠信書房).
- 岡田努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について、*立教大学教職研究*, 9, 21-31.
- 小塩真司 2004 自己愛の青年心理学, ナカニシヤ出版.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton University Press.
- Sanders, E.S., Field, T.M., Diego, M. and Kaplan, M. 2000 The relationship of internet use to depression and social isolation among adolescents. *Adolescence*, 35, 237-242.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究, *心理学研究*, 65, 54-60.
- 田中道弘 1999 Rosenbergの自尊心尺度に対する回答理由の研究, 日本青年心理学会第7回大会発表論文集, 29-30.
- 田中道弘 2000 自己肯定感尺度項目の検討、日本応用心理学会第67回大会発表論文集, 57.
- 田中道弘 2002 文化と自己、梶田勲一(編) 自己意識研究の現在, ナカニシヤ出版, pp.171-187.
- 田中道弘・上地勝・市村國夫 2003 Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討, 茨城大学教育学部紀要(教育科学), 52, 115-126.
- 田中道弘 2005a 青年の精神的健康を捉える指標の検討: 自己肯定感と時間的展望の視点から自己心理学, 2, 26-34.
- 田中道弘 2005b 自己肯定感尺度の作成と項目の検討, 人間科学論究, 13, 15-27.

### (資料1)

自己肯定感尺度 ver. 2

1. 私は、自分のことを大切に感じる。
2. 私は、時々、死んでしまった方がましだと感じる。\*
3. 私は、いくつかの長所を持っている。
4. 私は、人並み程度には物事ができる。
5. 私は、後悔ばかりしている。\*
6. 私は、何をやってもうまくできない。\*
7. 私は、自分のことが好きになれない。\*
8. 私は、物事を前向きに考える方だ。

逆転項目は、\*で記している。調査の際には、\*を取ったものを表記する。

### (資料2)

インターネット・モラル尺度 ver. 1

1. インターネット上の相手なら、何を言っても構わないと思う。
2. インターネットで嘘の情報を流してみたい。
3. もしバレなければ自分もコンピュータウイルスを作成してみたい。
4. チェーンメールを誰かに送信してみたい。
5. インターネットの中でも、エチケット(ネチケット)は大切だ。\*
6. “インターネットの中の自分”と“現実の世界の自分”と違いを感じる。
7. インターネット上で、嫌いな人物の個人情報を晒(さら)してみたい。
8. インターネット上では口論になりやすい。
9. 出会い系サイトにアクセスする。
10. 稼げるのなら自分もインターネット上でマルチ商法(ねずみ講)に参加したい(もしくは主催してみたい)。

逆転項目は、\*で記している。調査の際には、\*を取ったものを表記する。